

子どもと保育者が共につくりあげる保育環境

企画・進行：藤川志つ子（淑徳大学短期大学部）

菅井洋子（川村学園女子大学）

話題提供者：伊藤礼子（川村学園女子大学附属保育園） 野木恭子（川村学園女子大学附属保育園）

浦野里美（川村学園女子大学附属保育園） 秋庭直美（川村学園女子大学附属保育園）

指定討論者：池田純子（淑徳大学短期大学部） 菅井洋子（川村学園女子大学）

企画主旨 淑徳大学短期大学部 藤川志つ子

乳幼児期の環境については、保育者が見通しをもって計画を立て、意図的に構成していく必要があると保育所保育指針に記載されており、保育実践において子どもを取り巻くあらゆる「環境」の重要性は周知のことである。本シンポジウムでは、園内研修をきっかけとして保育者が子どもを取り巻く環境について改めて考え、子どもに問いかけ、共に話し合い・アイデアを出し合い「子どもと共に」つくりあげてきた保育実践について報告していただく。子どもと共に考えることによって、保育者が意図していなかった活動が展開されたなど、子どもとのやりとりの中で生まれた保育環境や、子どもと保育者、保育者と保育者、子どもと子どもの学び合いの姿から得られた保育環境についての報告など、今回、保育実践者としての立場から子どもひとり一人が主体的に様々な体験ができるよう環境を整えた実践とくつろぐという視点から保育環境を構成した実践について話題提供をしていただき、本大会の主旨である「保育実践と理論のしなやかな往還」に沿って、話題提供された「環境」について、指定討論者から実践知と学問的観点から意見をいただき、子どもの主体性を育む環境を子どもと共につくるという視点で皆様と意見交換をしていきたい。

話題提供1. 園内環境の変化

川村学園女子大学附属保育園 伊藤礼子

主任保育士の立場として、園の保育が職員全員に共有され、子どもの様子が語り合える環境になっているかという視点で改めて考えた。

クラス単位での活動は十分に吟味され行われていると思われるが、保育者が他のクラスの活動や子どもの姿を共有できる環境が整っていないことに気づいた。



図1 玄関

そこで、一日の中で保育者が必ず目にする場所(図1)にクラスの保育内容に写真を添えて掲示することを園内研修後、数人の保育者と一緒に試みた。結果、他のクラスの保育者、子どもや保護者の目にとまり、保育の様子や子どもの姿を共有できるきっかけとなったのではないかとと思われる。その試みは園全体へと広がり、現在では各クラスが取り組む「だいありー」として、保育の取り組みを知らせる・知る、環境の一つとなっている(図2)。その他、保育者から子どもの活動の様子を見て、幼児クラス前の廊下に製作コーナーや製作展示、製作途中



図2 玄関「だいありー」

のコーナー(毛糸編み等)、絵本コーナーを設けたらどうかという提案があり設定を試みた(図3)。現在その場所は、子どもが集う場となりクラスを越えたかわりが増えていったように感じている。



図3 幼児廊下コーナー

子どもたちの姿を保育者が共有する環境をつくること、子どもの今の姿に気づくことにつながり、さらなる環境の変化を生み出していることを実感している。

話題提供2. 製作コーナーの充実としたいことができる嬉しさを味わう環境設定

川村学園女子大学附属保育園 野木恭子

園生活を送る中で数字に興味を持ち始め「長い針が〇になったら」と時計を意識するようになってきた子どもたちの姿から、時計づくりを提案し一緒に製作を楽しんだ。つくり終えた後一人の子から「もうひとつ、つくっていい？」の声があり、他にもつくりたい子がいるのではないかと考え、部屋の隅にあった製作コーナーを拡充し様々な廃材や素材・道具を使いやすいように設置し、いろいろな時計が載っている写真を掲示する等、環境調整を試みた。その環境にすぐに反応して時計づくりを始める数人の子どもの姿が見られた。その姿を見て、他の子どもたちも徐々に参加しクラス全体に広まっていった。つくったものを見せ合うことによって有能感が感じられるように、自分のつくったものを廊下に掲示できるスペースを用意したところ、子どもたちの満足そうにじっと眺める姿、作品を真ん中にして友だちと笑顔で語り合う姿が見られた。

また、廊下を通った乳児組が手に取り興味を持っている様子を見て、「時計欲しいのかな」「時計屋さんしようよ」「レジや看板、お金もいるね」と気持ちが膨らみ時計屋さんごっこへと遊びが広がっていった。そしてこの後もいろいろなお店屋さんへと遊びは継続していった。子どもたちがしたいと思うこと、思い描く世界を表現する言葉を保育者が丁寧に拾い、時期を逃さずに環境を整えることで遊びの世界が広がっていくことを実感した。今後とも、子どもたちがしたいことができる嬉しさを味わえるように、子どもたちが表現する言葉に敏感になり共にワクワクしながら環境を用意していきたい。

話題提供3. 0歳児の保育環境の変化

川村学園女子大学附属保育園 浦野里美

新年度当初の0歳児保育室内は、保育者が食事・午睡・遊び等、子どもの流れに従って用意していた空間であった。子ども自身が自分の好きな遊び・ペースを大事

にしながら主体的に行動できる環境を用意したいと考え、保育室内と保育室前の廊下の環境構成の検討を試みた。

まず保育室を食事・午睡・遊び・運動のコーナーに分けた(図1)。その他保育室が家庭と大きくかけ離れないよう、ぬくもりを感じられるようなくつろぎのコーナー(図2)も設置した。保育室前の廊下には絵本やマット・ソファを設置し、乳児用の図書館(図3)をつくった。

その結果、保育室のコーナーに子ども自ら移動し、遊びを選択し集中して遊ぶ姿が見られるようになった。更に、継続して遊び続ける様子が見られた。また、食事や午睡等、子どものペースに合わせた保育が可能となった。保育者も子どもの発達に沿いながら関わることで、余裕が持てたように感じている。また、当初乳児用と考えていた図書館は、異年齢が集まる場所として頻りに利用され、様々な交流が見られたのと同時に、登降園時の親子のコミュニケーションの場としても利用されている等予想を越えた場となっている。成長著しい0歳児クラスでは空間のつくり方を常に考える必要があることを実感した。発達の差がある子どもたちがそれぞれ楽しめるよう工夫することは常に意識すべきことと考える。今後も子どもの動きの変化に対応しながら、子どもと共に保育環境をつくりあげていきたい。

話題提供 4. 室内環境構成からの遊びの広がり(4歳児)

～したいことが見つかるコーナーづくりとクラスミーティング～

川村学園女子大学附属保育園 秋庭直美

新年度当初子どもたちの落ち着かない様子や一人ひとりがじっくりと遊び始める環境への見直しの必要性を強く感じ、以下のように室内環境構成を変化させた(図1,2)。ポイントとして、壁や仕切りを利用し独立したコーナー化、あえて狭い空間を設定し子どもが遊びの展開上自由に設定できるような空間の確保、遊びの継続や保障がされた環境、玩具の精査、安心してくつろげる場の確保を意識し室内環境の整備に取り組んだ。

その結果、一人ひとりが落ち着いて遊び込み、目的を持って行動する姿や、安心してくつろぐ姿が見られるようになった。また、自分の思いを伝え合うきっかけづくりとして「ばら組会議(クラスミーティング)」を開始した。毎日行われる会議の中でのびのびと自分の思いを表現できたことが自信や喜びにつながっている。運動会の



図1 遊びのコーナー



図2 くつろぎのコーナー



図3 乳児図書館

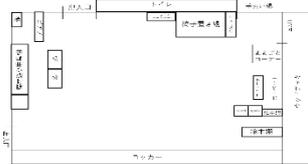


図1 室内環境改善前

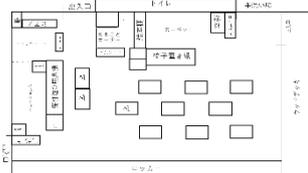


図2 室内環境改善後

親子競技についても話し合う機会を持ち、子どもと競技内容を決定していった。会議で話し合った議題について、子ども自身が意識した行動や発言をする場面が多く見られるようになった。会議にて疑問点があがった場合は、解決を急がず「宿題」を提案し、保護者と共に考える機会にしていった。この取り組みは友だちの思いを知ることにつながり、「言葉」によるコミュニケーションや自己表現、自ら考え行動する力につながることを願っている。現在も子どもの姿や遊び、意見を積極的に取り入れ、子どもと共に日々つくりあげている。

指定討論 子どもたちと共感して保育を楽しむ

淑徳大学短期大学部 池田純子

子どもたちが環境を通して「主体的・対話的で深い学び」を遊びの中で育むために、子どもが主体的に遊ぶ環境を整えることや援助のあり方を考えることはどの園にとっても保育者にとっても重要なことである。子どもたちが主体的に活動するための保育者の子ども理解や援助、子どもが主体的に関わりたくなる環境作りを話題提供者の事例から考えていきたい。保育者が他のクラスの活動を共有できるようにすること、0歳児クラスの子どもの活動が年齢にあった活動ができるような環境を準備すること、子どもの要求に時期を逃さずに応答すること、遊びの空間の工夫や子どもが自分の思いを表現できる場を用意すること。子どもたちが感じていること、興味を持っていることを保育者が感じ取ることを意識的に行うことで子どもの姿がよく見えてくる。よく見えてくることで、子どもたちの興味・関心に寄り添うことができるようになり、子ども主体の保育が展開されるようになる。そしてそのことを保育者が体感できるようになることで、子どもと共感して保育を楽しむことができるようになる。体感したことや共感する気持ちを理論的に確認するためにPDCAサイクルの体制を整えることも必要である。

指定討論 子どもたちの姿・声からつくりあげる保育環境

川村学園女子大学 菅井洋子

子どもと保育者が共につくりあげる保育環境について、話題提供者である保育者の思いや願いもうかがいながら子どもの姿や声から展開した保育実践を「子どもの視点」から考えていきたい。実際に子どもの目の高さや視野等を体験し子どもの姿から保育環境を探究した研究や、話題提供者の園の子どもの活動が園内の好きな保育環境を撮影した写真や子どもたちの多様な声をもとに語り合いたい。

また子どもと保育者が共に保育環境をつくりあげるためには、子どもがどのような環境に興味や関心をもっているのかを子どもの主体的な行動から保育者が読み取りながら応答し、保育環境を構成しあい活動を展開していくことが重要となる。目の前の子どもの姿や声からいかに周囲の環境へ注意を向けあい共同活動を展開していくのか、「共同注意」を援用しながら多様な子どもたちにとっての保育環境や保育環境構成プロセスの意味を探してみたい。

以上から本シンポジウム参加者と共に子どもの姿・声をもとに保育環境を考え、今後の保育につなげていきたい。

※本シンポジウムに関する研究や発表内容については、事前に園や保護者に許可を得ており、倫理的配慮がなされている。